

日銀グランプリ 優勝おめでとう！

昨年12月3日、袴姿の本学の女子学生3人が日銀グランプリで優勝を果たした。日銀グランプリとは、全国の大学生が「わが国の金融への提言」というテーマの下、アイデアを競うコンテストだ。論文、プレゼンの2段階の審査を経て優勝が決まる。審査員は、日本銀行の中曽宏副総裁を代表とする一流の知識人だ。そのような厳しい審査を突破した3人のうち、今回は岸さんと樋口さんの2人に話を聞いた。

優勝を振り返る

「日銀グランプリ参加のきっかけは、なんですか？」
日銀グランプリ参加のきっかけは、学内にどまきつかけは、自分の力を試したいと思っただけです。そのために、学外のコンテストに積極的に参加している下川ゼミに入りました。下川ゼミの学生は、何らかのコンテストに参加することが必須条件となっています。ゼミの学生は、皆日銀グランプリの一次選考である論文を提出しています。論文提出後、下川教授の「自分が



岸佳奈（左）と樋口菜々（右）
本学経営学部3年（当時）
経営学科下川ゼミ

を頂き、優勝することができました。ありがとうございます。」
もう一つは、私たちがプレゼンテーションを一番準備をしてきたという自信があったからです。日銀グランプリというのは、成果発表会の場ではなくて、自分たちの案を審査員と一緒に深めていく場です。審査員との対話を意識した発表を心掛けたことも優勝につながったのだと思います。

「多くの人の支えというのは具体的にどのようなものがあったのですか？」
例えば、審査員の経歴について分析するということは、下川教授からのアドバイスでした。二次審査では、プレゼンテーションの発表（15分）と質疑応答（15分）から構成されるのですが、そもそも質疑応答とは、審査員が生得した知見からしか生まれません。言い換えるならば、審査員は、私たちのプレゼンテーションを自分たちの生活に当てはめて考えるとされます。そう考えたときに、「この人たちは、どういうバックボーンがあつて、どういう考え方を

東京物理学校

風聞

本学には「入りやすく出にくい」という風聞がある。留年する者が多いという現状を嘆いたものだ。だが平成27年度における2年生への進学率を見てみると、理学部第一部が89・3割、工学部が94・5割だ。進級率が低くはないにも関わらず流れているこの風聞。本学が東京物理学校であつた時代からすでに存在していた。

「入りやすく出にくい」

東京物理学校は、1881年9月に、私立稚松小学校を放課後に間借りする形で開校した。誰もが自由に入学し、物理学について真剣に勉強できる学

講義することを決意した。当時の郵便報知新聞には、次のような広告が載っていた。「現在の日本の物理学は、法学の諸学科に比べて軽視されている。現に官立大学以外では、理学のための学校がいまだ少ない。易しく物理の諸学科を学びたい者は誰でも、授業料を持つて稚松小学校まで来ること。」

注目したのは、少ない授業料を払えば誰でも授業を受けられるということだ。東京物理学校には、入学試験と呼ばれるものがなかった。これが当時から「入りやすい」と言われていた理由だ。一方、進級や卒業に關しては非常に厳しかった。教授はボランティアとしてやっていたため、授業料を払えば誰でも授業を受けられるということだ。東京物理学校には、入学試験と呼ばれるものがなかった。これが当時から「入りやすい」と言われていた理由だ。一方、進級や卒業に關しては非常に厳しかった。教授はボランティアとしてやっていたため、授業料を払えば誰でも授業を受けられるということだ。

当時の物理学校

東京物理学校には、他に有名なが東京大空襲の逸話だ。1945年3月10日、アメリカの焼夷弾爆撃によって、東京一帯は灰燼に帰した。その際、物理学校の教員や生徒は終始消火活動に従事し、校舎は全焼



▲復元された近代資料館

東京物理学校は廃止され、「東京理科大学」に引き継がれた。本学には前述の「入りやすく出にくい」以外にも風聞がある。「本学学生はチェックシャツを着ている人が多い」というのは有名な話。かつて本誌で調査したこともある。結果は、チェック柄よりもボーダー柄の服の方が多いというものでした。本学学生のおしゃれに対する意識が向上したのか、全体の趣味が変わっただけであるのか真偽は定かでない。

現在の理科大

を免れた。焼け残った校舎には多くの戦災者を招き、避難所とした。これを復元したものが、東京理科大学近代科学資料館だ。物理学校に逃げてきた人たちの中には芸者もいたため、間接的に神楽坂の芸能文化の血脈を守ったことになる。余談だが、空襲の翌日も平常通り講義が開かれていた。戦後の物理学校生は、常に白衣を着ていた。物資の乏しいこの時代に着られるものを探したところ、大学には白衣がなかったから、真冬の寒空の中でも、物理学校生が白衣を3枚重ねにして歩いていったのを見たという人もいる。

オープンスペース

建築と高め合う

返る。

連載「教授の歩き方」は、専門家だからこそ目についてしまう教授目線の街の見え方をのぞく。初回の今回は工学部建築学科の岩澤浩一助教に話を聞いた。街歩きを通じた「建築の公共性」へのまなざしを語ってくれた。

故郷の町 記憶に残る風景

高層ビルの隙間に神社。こうした光景に出会ったことはあるだろうか。神社は「古くからそこで人が生活していた場所の手がかりであり、縄文期の遺跡と重なることも多い」のだと言う。長い時を経てなお、人々の記憶に残り、大切にされてきた。街で、つい気になってしまう場所の一つだ。

ふるさとにも、神社があり、そばに縄文期の遺跡がある。出身地の北海道天塩郡天塩町は、天塩川の河口にある小さな街。古くから先住民やアイヌが魚や貝を捕って暮らしていた。「天塩川の河川敷と、その後ろに広がる日本海。これがぼくの「原風景」と衛星写真を指し示しつつ、かつて見続けていた故郷を振り

「この街に、これからつくる建築がどうあるべきか。チームで協力し、クライアントとも検討を重ねます。街を読み取り、あるべき建築の考え方を共有し、それから細部に移っていきま



岩澤浩一 工学部建築学科助教
本学工学部建築学科助教
北海道天塩郡天塩町出身

そうやって見せてくれたのは、自身が設計に携わった福生市庁舎の載った冊子。設けられたオープンスペースは、朝夕の散歩から七夕祭りの会場にまで使われ、市民の憩いの場となっている。「いつでもアクセス可能で自由な場所

街の中

大切な空間を探して

街を見つめる余裕がないときもある。「最寄りの金町駅から、学生の波にもまれるようにして通っています。狙いのひとつだ。「街には、それぞれ違った魅力があります。街はこうあるべきだという一般解はなく、その街にとって大切なものは何かを見つけて欲しい」と、学生へ向けた思いを語った。

身近な街・ふるさととの街にも、心に残るオープンスペースがぎっしりとあ

教授の歩き方

岩澤浩一助教

